

平成30年度第2回奈良県総合教育会議 意見概要（本日の関連部分抜粋）

○とき・ところ：平成30年10月18日 奈良県文化会館 集会室A B

○議題 教育・文化の振興と学力の向上について

※今回の資料とほぼ同様の資料による委員の議論結果

<各委員・顧問からの意見要旨>

（学習意欲の向上）

- ・就学前段階からの取組と小・中学校への接続が必要。さらに、就学前教育の必要性について保護者と意識を共有すること。
- ・学校では、学力・学習状況調査結果を受けてのP D C Aサイクルが機能していないのではないか。
- ・子どもが、学校で得た知識を「使う機会」がない。知識をどう使えるかを教えるべき。
- ・学校の先生にも分からないことがたくさんあることも教えるべき。知識を丁寧に教えることに注力しすぎではないか。
- ・学校の先生だけで全てを教えることはできない。外部の様々な人の力を借りながら子どもに教えていけばよい。地域の文化財のことなら学芸員、科学の実験なら実験技術のある人など。
- ・先生は、子どもに対してテストの点数だけではなく「その子ができること」を見い出してほめてあげることが必要。ほめることで学習意欲が増すだけでなく、その子の存在価値を他の子に認識させることにもなり、クラスの中でのいじめの防止や規範意識の醸成にもつながる。子ども一人一人には特徴があって個性がある。先生は、子どものできないことをとりあげるのではなく、得意なことを伸ばし、良いところを大事にする意識を持つべき。
- ・子どもにとって学校や勉強が楽しくなるようになってほしい。

（規範意識）

- ・奈良県は、三世代世帯が少ない。子どもが大人から規範を学ぶ機会がなくなっている。
- ・地域の高齢者を巻き込み、子どもに読み聞かせなどをするような機会づくりが必要。
- ・教員の働き方改革も必要。先生が余裕を持って子どもと向き合う時間を確保しなければならない。
- ・学校の規則が、子どもが守れないような細かすぎる内容になっていないか。昔とは違い、押し付けではなく、子どもの気持ちも汲み取りながら規則を決めていく時代ではないか。

## <振り返り>

### ○教育長

- ・規範意識の醸成について、教員が「上から目線」ではなく子どもの気持ちを汲み取るように接するべき。
- ・学力と「読書好き」の関連が強いデータが出ているが、教育委員会として読書活動の推進に注力していくべきと考える。
- ・教員への教育については、「ケースワーカーの100の心得」に倣って、「奈良県教育の50の心得」のようなものを作成したいと考えている。
- ・私立の児童生徒は、小学生で「国語が好き」、中学生で「数学が好き」の数値が高い。このことから、授業など私立学校を参考にすべき点もあるのではないか。

### ○知事

#### (学習意欲)

- ・「先生に聞けば全て分かる」という幻想を取り除き、むしろ分からないことを子どもに問いかけることで、探究心を育てられるのではないか。
- ・教育現場における、統計結果の受け止め方が重要。
- ・教室の中だけが教える場ではない。校外での教育がないといけない。

#### (規範意識)

- ・「利他心」といった他人を認める意識があれば、いじめは起こらないはず。教育の行動経済学、アンガーマネジメントを取り入れた教育の実践等の研究も必要ではないか。
- ・アメリカの学校での生徒へのほめ方や、アンガーマネジメントなど、海外から学ぶことはたくさんある。
- ・資料や物、時間をうまく整理分類できるようになれば、成績も良くなるのではないか。